

さくらんぼ通信



さくらんぼ保育園 園だより No.270

令和5年7月3日(月)発行
 さくらんぼ保育園 園だより
 桜が丘東2-2-809
 Tel 995-9071
 Fax 995-9072

『それぞれの思い』

ある日ゆき組の A さんがテラスの窓を叩きながら保育者を見て笑ってました。私たち大人は咄嗟に「危ないよ」「優しくね」等の行動を止める声かけをしまし、しまいそうになるものです。しかし「どうしたの?」と声をかけその子の側に近づくと、外にキリギリスがとまっていた。どうやら外にいたキリギリスのことを伝えたくての行動だったようです。大人からすると危ない、やめてほしいと感じる行為でも、言葉で伝えることが難しいこどもたちにとっては気づいてほしい、楽しいサインであることもあります。

一緒に生活する中でこどもの発想や気づきのおもしろさを日々感じます。一つの行動を多角的に捉え、保育者としてこどもたちの思いや気づきに対して敏感でありたいと改めて感じました。

原谷 鎮世

今月のBEST SHOT



7月 行事予定

- 7日(金) 誕生会
- 19日(水) お話会
- 25日(火) 避難訓練



8月 行事予定

- 12日(土)~15日(火) お盆合同保育
- 17日(木) 避難訓練
- 25日(金) 誕生会
そらキャンプ説明会

※おねがい!

園で箱ティッシュが不足しています。1人1箱の箱ティッシュのご協力をお願いします。

リズムであそぼう♪

『うさぎ』…上半身を脱力しかかをつけて両足を揃え、床から離してぴょんぴょんと軽く跳びます。二歳になると両足跳びができるようになり、3~5歳くらいになるとつま先で跳べるようになります。この運動は跳躍力を養い、こどもたちの大好きなリズムです。



こうやって足を揃えるよ。
準備 OK!



音楽に合わせてぴょんぴょん跳ぶよ♪



はな組 ゆき組



室内でAさんの遊んでいたおもちゃが突然転がっていきました。Aさんはそれを不思議そうに眺めた後、同じ大きさのおもちゃを別の場所に並べていましたが転がらず、今度は少し短いものを置いて様子を見ていましたがそれも転がらず。保育者がおもちゃを『ある場所』に置くと再び動き出し、笑顔でそのおもちゃと保育者を見るAさん。

実はおもちゃが転がる理由は扇風機の風。大人が扇風機を指さし「風だよ」と伝えることも必要かもしれませんが、こどもが興味を持ち次第にどのような動きをするか、大人がこどもの動きや興味を止めることなく、観守ることで保育者が予想していなかった動きや関わり、あそびに繋がると改めて保育の面白さを感じました。

にじ組



ひも通しでは、ビーズの紛失や踏みつけによる怪我、誤飲を防ぐためにカップにビーズを入れて遊ぶように声をかけています。ある日、同じようにカップに入れて遊ぶように声をかけていたのですが、入れ物をひっくり返している姿がありました。一見ばらまいて遊んでいるように見えたのですが、どうしたんだろうと観ていると、「あった♪ピンク色♪」という呟きが。下の方にあった好きな色を取ろうと理由があったのです。すぐに注意してしまいがちな状況ですが、観守ることで小さいカップだと好きな色が取りにくいということの気持ちに気づくことができました。その思いを受け止め、個人に適した入れ物の再検討をし、自分のこだわりをもって集中して取り組めるようにしていきたいです。

観守り保育の中で見えてくる こどもの姿と保育者の関わり

「観」という漢字には物事を見て意味や本質を捉える。考えるという意味があります。

こどもたちの姿や行動からこどもたちの思いや考えをくみ取り、保育に活かしていきたいと思い、「観守り保育」という考えを大切に、実践しています。

せう組



ある日、こどもたちが園庭奥の木の近くで枝を空に上げて何かをしていたので、危ないと思いながらこどもたちに聞くと「木から出ている蜜を枝につけてカナブンを引き寄せるとのこと。「カナブンって蜜を食べるの?」と聞くと「何を食べるか分からないから部屋で飼って調べたい」と言うので「みんなに聞いてみる?」と伝えると、自分たちでそら組のみんなに聞いていました。実際にカナブンを飼い、木の蜜のついた枝を一緒にカゴに入れてみましたがカナブ人が上手く枝に登れず困っていました。「カナブン困っているね」としばらく考えた後「あ!じゃあカブトムシのゼリーを入れてみるのはどう?」との意見がでたので、みんなの納得のもとカブトムシゼリーを入れてみると、カナブ人がゼリーを食べていました。「カナブンってカブトムシのゼリーを食べるんだね」とみんなで新しい発見をしました。次は空になったゼリーのカップに蜜を入れてみようとかどもたちで話しています。枝を振り上げることが危ない事や、何を食べるかなど大人の思いや先入観を先に伝えるのではなく、こどもたちが自分で考えられる環境を大切にして観守ることで、こどもたちがやりたいと思う好奇心をかきたて、こどもも大人も成長できる場としていきたいです。

のき組



湿った土でどろだんご作り。なかなか上手く丸まらず悪戦苦闘していたので保育者が「丸くならないね」と伝えると「もっと固くする」と言って手に力を入れて土を固めていました。しかし、手を広げるとぼろっと崩れ「できん」との声が。「他にいい方法ないかな?」と考えていると「あっ水がいる」と言うので、一緒にジョウロで水をくんで土の上に流しました。「どのくらいかな?」と水を流しながら聞くと「ストップ」と。さっきよりもしっかり水で湿った土で再挑戦。「やったー丸くできたよ。ほら」と嬉しそうに披露していました。

こどもたちが困っていると、大人が知っている答えをすぐに出しがちですが、こどもたちと“どうしたら自分の思っているようになるか”を考えられる声かけを心掛け、こどもたちと一緒に考えながら試すことで、うまくいかなかったことも成功も学びに繋がるようにしたいです。

馬し組



バンダナで保育者が何気なく作った輪っか。それがこどもたちには『わなげの輪』に見えたようで「わなげしたい」「作ってみる」ということで『的』を作ることにしました。細長い棒を見つけ「これを立てる」と足で挟んだり、手で持ったり…でも自分で棒を持つと距離が近すぎて楽しくないことに気づきました。「どこかに棒を置けたらいいね」と投げかけると「床にテープで貼ろう」とセロテープで貼ってみましたがすぐにはがれうまくいきません。「じゃあのは?」とのりを床につけようとしたので「のりって何を貼るものだけ?」と聞くと「紙を貼るもの」「紙の上のりで貼ろう」とアイデアが展開していきます。ですが、やはりのりで貼ってもうまくいきません。すると床に貼っているビニールテープを見て「これは?」と発見。ビニールテープで貼ることにしたのですが「棒もテープも持つのが難しい」と困っていると「こっち持つよ」と友だちと協力しながらなんとか棒をたてることができ、わなげを楽しみました。すぐに答えに導くのではなく、ヒントを出しながらも一緒になって考え、こどもたちが出したアイデアをたくさん試してみたいと思っています。